

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4092300088		
法人名	社会福祉法人 南八女福祉会		
事業所名	グループホーム 春の山		
所在地	福岡県八女市上陽町北川内182-1		
自己評価作成日	平成26年12月11日	評価結果確定日	平成27年2月24日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.jp/40/index.php?action=kouhyou.pref_search.keyword_search=true
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社アール・ツーエス		
所在地	福岡県福岡市博多区元町1-6-16	TEL:092-589-5680	HP: http://www.r2s.co.jp
訪問調査日	平成27年1月7日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】(Altキー+enterで改行出来ます)

グループホーム春の山では、入居者、家族にとって良いことを一番に考えるようにしている。そのために、それぞれの担当者のアセスメントを基に計画作成担当者が再アセスメントし、ひとりひとりの課題(ニーズ)にあわせたケアプランを作成。毎日、サービス内容を振り返ることで必要な支援ができていのかを見直すようにしている。
 毎日を気持ちよく生活していただくために、環境整備(ホーム内・外の清掃)に力を入れている。入居者と一緒に清掃することで、「ありがとうございます」「きれいになった、気持ちよか」「助かります」といった声の掛け合いが毎日あり、気持ち良く生活でき、気持ちよく仕事ができる職場となっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

2ユニット型グループホーム「春の山」は、自然の豊かな山あいには位置するが、比較的交通量の多い道路に面し、隣には協力医療機関、徒歩圏内に大型園芸店や、土曜市の開かれる出店場所などがあり、外出や地域との交流にも適した環境である。開設後まもなく3年を迎えるまだまだ新しい事業所ではあるが、地域とのふれあいは充実しており、若い管理者を中心に全職員が丸となって、利用者や家族の一番大事なこと、より快適な生活を常に考え、サービスの中で試行錯誤を繰り返して、職員間でも理念を意識して行動することがよくよく定着してきたようである。職員は日々のケアの上でも情報を共有、医療機関との連携体制も築かれていて、家族を含めた信頼関係をもとに支援を広げている。残存能力や意欲次第で、自分のできる事は自分で行い、家庭的な雰囲気の中で、日常生活が楽しくなるような工夫に努めている。研修を通してのスキルアップにも前向きに取り組み、実践に結び付けており、今後の展開が楽しみな事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	<input checked="" type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:30)	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は、玄関と各ユニット、事務室に掲示。毎日、朝のミーティング時、理念の唱和を行っている。ケアプラン作成時にも、理念を意識している。月1回の定例会では、入居者ひとりひとりの意向に沿った支援ができていないか振り返る時間を設けている。	「一人一人のあるがままを受け止め、意向に沿った生活を支援します」の事業所独自の理念を、管理者が繰り返し説明し、職員全員も意識して行動することで、開設から3年で、ようやく定着してきたという事業所の自負がある。現在、この理念に基づき、年度替わりの3月末に、職員が個別に1年間の行動目標を立てるようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	職員が地域の方と気軽に気持ちの良い挨拶や会話ができるように心がけている。避難訓練には、地域の方に参加していただいている。敬老会では、上陽町で活動をひろめておられるコーラスグループや和太鼓、中学生などにきていただき、少しずつ付き合いを広めている。	定期開催する敬老会は、前回から屋外開催に変更し、地域住民の参加もあり、琴や和太鼓、コーラスなどのボランティア利用などで喜ばれた。地域行事(毎週の土曜日、花火大会など)に加え、保育園や、「ひまわり応援隊」という小中学生との交流、毎朝の玄関前の清掃などの他、隣接の病院を訪れた患者が帰りに立ち寄り、という事もあるなど、日常的に地域との交流が図られている。町内会には未加入だが職員の自宅に来る回覧板から情報を収集している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所内で実際に体験したことを、今年度最後の運営推進会議で発表する準備をすすめている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は2ヶ月に1回程度開催している。日頃の報告に加えて、活動を見ていただいている。会議の中では、グループホームについての質問等が多いが、終了した後に、地域の方からは地域の行事や状況、家族からは昔の話などを聞くことができ、その内容をサービス向上に活かすようにしている。	開催は定着しており、必ず行事(避難訓練、歯科の口腔ケアの勉強会など)と同日開催にしており、会議の出席者が、行事にも参加できるように取り計らっている。会議では、現在の取り組み状況や今後の活動計画等を報告し、参加者からの意見・要望・質問等に基づき、サービス向上に生かしている。また、議事録は玄関にて閲覧を行い、不参加のメンバーには郵送している。運営推進会議を、事業所の発展に結び付く有意義な場と捉えている。	利用者全員と家族、民政委員、市の職員、包括職員、区長、近くの福祉センター職員らで構成しているが、メンバー(特に家族)が固定しているうえ欠席者もいる。利用者の家族は交代制を基本にして、同業者や、地元の有識者、知見者なども含めたところで、メンバーの入れ替えを検討してはどうか。これにより、さらに様々な意見が出て、サービス向上に役立つ会議となることを期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議には、市の担当者にも参加していただいている。地域密着型サービス連携会議に参加し、市や他事業所からアドバイスを受けている。実地指導を受けたことでこれまで以上に市に相談する機会が増えた。	日頃から行政へ運営に関する報告・連絡・相談を行っており、行政と共にサービスの質の向上に取り組んでいる。平成26年10月には市からの実地指導もあり記録様式などの整備も進んだ。地域包括支援センターとの交流もあり、空き情報の確認や、運営上で困っている事、疑問点などについての相談を行い、アドバイスを受けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関は、施錠はせず開放している。目の前が道路であるため、入居者が外へ出られた時に、見守りができるようにチャイムが鳴るようにしている。職員同志の気づきも増え、身体拘束をしないケアにつながっている。	身体拘束に関するマニュアルがあり、日中は玄関(センサーの使用で対応)・勝手口・非常口とも施錠していない。職員は、利用者の離脱傾向を把握、見守り等を行うと同時に、近隣のガリンスタンドにも声を掛けるなどの配慮を行っている。研修の機会(年間計画に基づくが、現場での言葉での拘束が気になったため、管理者が予定を繰り上げた経緯あり)も設けており、その資料等もある。現状拘束はないが、対応の際に必要な家族の同意書は備えている。	

H26自己・外部評価表(グループホーム春の山)2.24

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	勉強会を開催。 家族からの相談には早急に対応できるようにしている。		
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	玄関に資料を準備している。 勉強会にて制度の理解を深めている。	今のところ、制度利用者はなく、利用者(家族)側からの相談もないが、事業所にパンフレットなどの資料を備えていて、行政につなげる体制は整っている。職員間での研修も行っており、その資料がある。利用者とその家族に対しては、契約時(利用開始時)に説明している。	関心のある家族や、開設後3年になり利用開始時から状況の変わった家族がいる事も考えられ、運営推進会議のテーマに取り上げたり、家族との連携、コミュニケーションの一つの話題にしたりして、簡単に制度を再度紹介してみたいか。家族も、制度の理解と同時に、事業所に対する信頼を深める事になるものと思われる。
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時に細かく説明を行っている。 又、入居中必要な部分は再度、詳しく説明している。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	代表者は、各ユニットに行き、入居者それぞれと会話する時間をもち、その中で気づきを職員へ伝えるようにしている。 面会時は、必ず近況報告をし、月1回のお便り発行でも様子を伝える形式としている。こちらから伝えることで、要望や気持ちを話して下さることが増えてきている。	利用者の願いや要望等(外出など)には、日々のかかわりの中で聴取を行い、迅速な対応につなげている。また家族には、本人の写真付きの近況報告を郵送し意見を求め、面会時や電話などによって意向を伺う機会づくりに努めている。意見箱も設けており、家族からの苦情は記録と同時に会議にて報告、情報を共有する。	利用者や家族からの意見や思いの吸い上げにも前向きではあるが、なかなか言えない方もいるようであり、以前より企画中であるというアンケート調査を実施し、その反応を受け止める事で、さらに職員の認識と、利用者(家族)とのコミュニケーションが高まるのではないかと恐れ、期待をしたい。
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	普段何気ない会話をすることで、相談しやすい雰囲気作りを意識している。	月1回の定例開催の会議や、随時の個別面談において、職員は意見や気づき等何でも言える環境にある。また管理者はそれを積極的に運営に取り入れ、必要に応じてフィードバックを行う事で、職員の意欲にもつなげており、信頼関係を築いている。離職は最小限に抑えていて、職員が交替する時の引継にも十分時間を取っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の性格や、得意、不得意分野を把握。特に得意分野を伸ばすようにしている。 職員ひとりひとりと話す時間を設け、働きやすい環境作りに努めている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また事業所で働く職員についても、その能力を發揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	年齢、性別、資格による排除は行っていない。 ひとりひとりの良い所を書き出し、そこを伸ばしていけるようにしている。	採用選考において、人柄や特技などの持ち味を重視、性別や年齢等を理由に対象から排除する事はない。60歳代の職員の雇用もある。日頃より職員休憩室にて十分な休憩時間が取れている。また、入職後のスキルアップ、研修への参加、資格取得の支援にも前向きで、安心して働ける職場環境での安定したサービス提供につなげている。	

H26自己・外部評価表(グループホーム春の山)2.24

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	勉強会を開催。 日頃から言葉づかいや接遇について、その都度伝えるようにしている。	事業所内にて倫理研修を行っており、管理者が中心となって職員全員が、利用者一人一人のその人らしさを大切に受け止める支援の実践に取り組んでいる。職場内でのセクハラやパワハラなどの雇用上の問題がないよう、管理者は注意している。	内部での研修の他に、外部研修に参加した職員による伝達研修を充実させたり、あるいは行政による講師派遣やDVDなどを活用した勉強会などを行う事により、さらに全職員が認識を深められる事を期待する。
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	月1回の勉強会や外部の勉強会に積極的に参加できるようにしている。 研修案内を回覧し、興味がある事から自由に参加できるようにしている。 また、こちらからすすめることもある。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型連携会議や部会の勉強会などに参加し、交流する機会を増やしている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前には、できるだけ本人と面会するようにしている。 入居前は管理者が中心となり聞き取りをしている。入居後は、管理者と計画作成担当者を中心に全職員で支援している。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	見学や申し込みをされる時から、支援経過記録を詳細に残すようにしている。 会話の中から要望等をひろいあげるようにしている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族等からの話をじっくり聞きながら、必要な支援を考えている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	朝の掃除毎日のことであっても、お互い「ありがとうございます」の声の掛け合いが気持ちよくできている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	医療機関の受診を家族に協力していただくこともある。家族から「こちらから連れて行きませう」と気持ちよく言ってくれたいことも多い。本人の自宅への思いを話し合いながら、家族と協力して外出などにつなげることも多い。		

H26自己・外部評価表(グループホーム春の山)2.24

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族の協力も得て支援することができている。 家族以外の面会では、また来ていただけるような雰囲気作りや声掛けを工夫している。	職員は、利用者の馴染みの場所や人について家族を通して把握しており、知人に訪問してもらったり(隣が医療機関で、受診の際に立ち寄られたりされる)、思い出の場所に個別に職員や家族と出かけたりする。馴染みの美容室へ孫と出掛けている方もおり、盆・正月などの外泊の支援も行う。届いた手紙の返事を書くように促したりもしている。利用者が築いてきた関係や、地域住民とのつながりを継続できるよう支援に努めている。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ひとりひとりこれまでの生活習慣や性格が異なるため、トラブルもある。そのトラブルを事前に防ぐために日頃から話し合っている。 入居者同士で散歩されたり、他者の居室へ訪問されたりと入居者同士の関わり合いも多い。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後も、医療機関などで会うこともあり、本人や家族の近況を伺うこともある。 入院後、退居された方は、こちらから連絡し、経過を尋ねている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	こちらから尋ねても、「今のまままでよかです」などの返答が多いため、日頃の会話や表情、行動などから、意向等を探るようにしている。その為にも、会話の内容も必要な部分は記録に残すようにしている。	利用者の思いや意向については、会議などにおいて、なるべくそれが叶えられるように、また職員の間で共有できるように、話し合いを行っている。記録は、独自のアセスメントシートを使用している。日々の利用者の言葉や行動、仕草、表情などから、意思疎通が困難な方も含め、本人本位の支援を行っている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前、入居時に聞き取りを行っている。それ以外でも、必要な内容はその都度聞き取りを行っている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	朝、夕の申し送りにて把握できるようにしている。又、出勤したら、把握できていない分の申し送り簿を各自確認することで「知らない」ということにならないようにしている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当者がアセスメントし、それを基に計画作成担当者が再アセスメントする。その後、仮のケアプランを作成し、その内容を他職員が確認し、話し合いをしている。別ユニットからも意見が出ることで、違った視線で考えることもできている。	独自のモニタリング表を使用、担当職員が作成した案に、カンファレンスで話し合われた事、日々の記録、利用者や家族の要望や意見などを含めて、責任者が「その人らしさ」を重視した介護計画としてまとめている。3ヶ月に1回または随時見直し、その都度家族への説明を行い、署名・捺印をもらっている。計画の内容は職員が共有、支援項目についての実践状況を毎日記録する事で、日々のケアに活かしている。	サービス担当者会議を定期的には開催してはいるが、その議事録に、かかりつけ医をはじめ関わる多職種への紹介ややり取りの内容、それに伴って家族に説明した内容などを記載することで、チームで介護計画を見直す事の意味を職員も認識、また多くの方に支えられる事で、計画もさらに充実したものになることと思われ、期待したい。

H26自己・外部評価表(グループホーム春の山)2.24

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録は詳細に残している。計画作成担当者は、アセスメントと日々の記録を読み返してプラン作成している。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	月1回の定例会や毎日のミーティングで話し合い、その時必要なサービス内容を検討している。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ひとりひとり出来る事、得意なことを発揮できる機会を多くもち、気持ちよく生活できるように支援している。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医はこちらから指定していないが、すぐ隣に協力医療機関があり、近いと安心だからと変更される方が多い。その判断は、本人と家族にまかせている。 夜間、休日でも電話や往診の対応をしていただき、入居者や家族、職員も心強い。	事業所の隣が協力医療機関で、受診時は職員が同伴する事ができるうえ、訪問診療も行う事もあり、利用開始にあたりかかりつけ医を変更するケースが多い。インフルエンザ予防接種もできる。それ以外の場合は、基本的には家族が医療機関にお連れするが、その際も家族から聞いた内容等を申し送り簿に記入するなど、情報の共有を心がける。訪問歯科の受け入れもある。適切な医療が受けられるような支援を行っている。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	現在、看護職員を配置していないが、管理者と全職員で受診時報告のメモをその都度とり、医療機関で相談できるようにしている。急な判断は、管理者や、医療機関への早急な相談にて判断している。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院となった時に、退院の時期を相談している。又、病院の担当者と家族とそれぞれに連絡をとりながら連携をとっている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	現在、医療連携体制加算をとっていないが、重度化した場合などの話し合いは、かかりつけ医と家族、管理者で行うことがある。	重度化・終末期のケアについては、事業所内での医療行為はできない事から、基本的に受け入れができないことが、明文化により定められている。このことは入所に家族等にも伝えてはいるが、重度化した場合の対応については、改めて事業所が家族や主治医と協議して判断する。方針や状況を確認、共有したうえで、利用者や家族にとって最善と思われる環境の中で、最大限の支援を行う。	

H26自己・外部評価表(グループホーム春の山)2.24

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年に1回応急手当普及員資格取得講習会に数名参加し、参加した職員が消防署より訓練用人形を借りて、他職員に指導している。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回避難訓練を実施している。訓練の反省点などを次に活かし、毎回計画書を変更し、前回とは違った訓練を実施している。訓練をする度に、新しい案が出てくるため、少しずつ改善されている。	災害対策マニュアルが作成され、年に2回の避難訓練を実施(消防署の協力のもと、夜間を想定)している。訓練の中で避難経路や役割分担の確認、消火器の使用方法的の説明も行っている。地域住民参加を促すため、運営推進会議と同日に開催、出席者を通して地域住民に呼びかけを行い、参加も見られた。AEDやスプリンクラーの設置の他、非常用備品の準備や期日管理、連絡網の整備など、災害に備えて万全を期している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	生活歴や性格などを知ることによって敬意をもった対応につながっている。 居室やトイレに入る時には、必ずドアをあける前にノックをし一呼吸置く、など小さいことだが大切な配慮も忘れずに行うよう意識づけている。	利用者の人格を尊重し、誘導や声かけを穏やかに行うよう心がけている。プライバシーを損ねない対応については、会議の中でも検討し、実践に結び付けている。写真の掲載に伴う個人情報使用に関する同意書あり。守秘義務についての認識は職員間で共有している。	外部研修への参加の機会を作り、参加者による伝達研修を行う事で、さらに職員の意識付けと徹底を図っていただきたく、期待する。
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自立支援について勉強会をし、その中で自己決定についてもふれている。 ひとりひとりの理解力や判断力にあわせて問いかけ方や方法をかえて接している。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	全て希望に沿うことは難しいが、ひとりひとりのペースにあわせるように心がけている。例えば、午睡が必要な方は、昼食後休まれるが、夜に影響しないように、長い場合は声をかける、というように、ひとりひとりのペースも大切にしながら、1日の流れや体調を乱さない配慮をしている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分で選択できる方、選択肢を与えたら選択できる方、選択肢を与えるが職員に任せられる方、と様々。その方にあつた対応をしている。白髪染めをされる方、家族が居室でカットされる方もおられる。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	野菜の皮むき、味付け、つぎわけ、食器洗い、などそれぞれができることをしていただいている。だんご汁は、職員が作るよりも入居者が作るほうがおいしく、皆さんが大好きなメニューとなっている。	職員が各ユニットのキッチンで手作り、献立は、調理師免許を持つ職員が、一人一人の嗜好を聞き、また食事の制限などにも考慮して、決定する。職員は利用者と一緒に食事を摂らず、また検食も行わないが、休憩室に置いている分、職員の感想や意見を募り、参考にしている。誕生日には、該当者のリクエストに答える。利用者は、当番制で、職員と一緒に準備や片付けのできる事を行う。外食も行う。畑で採れた野菜を献立に使用、食事時の話題にする。赤飯やだんご汁は評判が良い。	

H26自己・外部評価表(グループホーム春の山)2.24

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎食、摂取量のチェックをしている。カロリー計算はしていないが、調理師や栄養士の介護職員が中心となり工夫している。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアを実施。自分でできる部分ははしていただき、不十分な所をあとから介助するようにしている。 歯科衛生士より個別に指導もらい、その人にあったケアをしている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用し、できるだけトイレでの排泄を考えている。	排泄チェック表を利用し、一人一人のパターンを把握、職員間で情報を共有し、それに応じたさりげない支援を行っている。利用者の表情や仕草などを察知して、早めに対応する事で本人の自信につなげている。尿意のない方についても定時に誘導を行い、トイレで失敗がなくなった、というケースや、おむつ等が軽い物に移行できた事例につながり、排泄の自立に向けた適切なケアが行われている。ポータブルトイレの使用者、転倒の注意が必要な利用者など、個別の対応も行き届いている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事を工夫したり、活動量を増やしたりしているが、心疾患などがあり、無理に運動が出来ない方もおられる。色々な工夫をしても、できない場合は薬で調整している。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	平日毎日入浴される方もいる。特に希望がない方は体調等で調整している。	毎日入浴が可能(なるべく午前中だが、16時くらいまでは応じる)で、本人の希望を聞きながら、一人ひとりの状況に即した支援を行う。気持ちが和らぐように会話をしたり、ゆず(職員が家から持ち寄る)を浮かべたり、入浴剤を使用したりと、入浴が楽しくなる工夫を行う。拒まれる際には声の掛け方や時間を変えたりして、無理強いはいはしない。必要があれば同性介助も支援し、手すりの設置、脱衣場の床暖房などの配慮も見られる。職員は、入浴が全身や皮膚などの状況、体調などを観察する機会とも受け止めている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ひとりひとり、昼寝や夜間の就寝時間は異なる。夜間の睡眠を考えて、昼寝を調整することもある。夜間眠れないと心配される方には、温かい物を飲んだり、ゆったりと会話したりと安心できる対応を心掛けている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	主治医や調剤薬局に相談している。 処方薬は変更時には、薬情報を全スタッフが確認できるように更新している。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ひとりひとり得意なことや趣味などを聞き取り、入居しても継続できるよう支援している。 楽しい時間を過ごしてもらいたいと、レクリエーションの勉強会に積極的に参加し、学んだことをすぐにとりいれている職員も増えている。		

H26自己・外部評価表(グループホーム春の山)2.24

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	その日の希望を全て叶えることは難しいが、家族の協力を得て外出される方も多い。本人の希望は聞き漏らさず、どうにか希望を叶えたいと検討している。	外出には利用者や家族の希望を考慮し、利用者の気分転換や、普段出掛けられない所へ行く事での充実感を図る取り組みを前向きに行っている。毎日の散歩も、時には近くの大型園芸店に寄ったり、土曜市に行ったり、と変化に富んだ内容にしている。月1回程度は花見などのドライブに行き、年3回程度は、本部から借りた大型リフト車での外出を企画する。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	全入居者、通帳や現金の管理は家族がされているが、少額を手元に持たれている方も数名おられる。その中から支払いをされる方もおられる。金庫管理している分、外出時使用する場合、支払いを本人にまかせてみることもある。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話や手紙は受けることが多い。心配事があり、家族に電話される方もおられる。遠方の家族より贈り物が届いた場合には、電話することをすすめ、久しぶりの声に大変喜ばれる。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室ごとに日当たりが違い、日当たりが強い居室はすだれを使用している。照明は、温かみのある黄色を使用。壁に季節にあった装飾をしている。	季節感のある花の切り絵が飾られ、他にも書道の作品などが掲示されている。普通家庭にも見られるインテリアや調度類に加え、カーテンやクロスは落ち着いた色合いを使用し、家庭的な雰囲気を大切にしている。職員の顔写真、行事予定表の掲示の他、トイレの場所の表示もされている。不快なおいなどはなく、室内の温度、湿度、照明や音量などにも注意をして、居心地の良い空間になっている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングのソファや畳の部屋、廊下のベンチなど、ひとりで過ごすにも、気の合った方同士で過ごすにも使用できるようにしている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	職員側から本人や家族へ相談することもあるが、本人と家族とで話し合われて、居心地よく過ごすための工夫がなされている。孫を探してまわるからと、写真やぬいぐるみを持ってきてくださったり、ラジオをきいていたからと設置されたりと、本人のことをよく考えて頂いている。	ベッドは施設が用意するが、居室には利用者の使い慣れた家具や寝具が使用されている。居室の壁にはコルクボードが置かれ、写真が飾られている。ぬいぐるみやテレビ、位牌を持ち込んでいる方や、居室(洋間)に畳を敷いて和風にする方もおられるなど、それぞれに個性が感じられ、本人が快適に過ごせている事が想像できる。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	場所がわかれば一人で行くことができる方のために、案内をみやすくつけている。「今の季節、日付がわからない」をそのままにせず、見やすく、確認しやすいカレンダーを活用している。		